

令和6年度 真庭市親子で学ぶ広島平和学習プログラムの報告・写真

真庭市の小学生親子 10 組を対象に、広島国際会議場で開催された「ひろしま子ども平和の集い」に参加し、原爆資料館や平和記念公園の見学を行いました。

8 時過ぎに原爆ドーム前駅で降車し、爆心地のすぐ側で、「平和の鐘」を聞く事ができ、皆で黙とうを捧げました。79 年前のこの瞬間に原爆が投下され、40 万人以上の方が亡くなったこの地で、決して核兵器を使用してはならないと、平和への決意を新たにしました。



国際会議場で開催された「ひろしま子ども平和のつどい」では、はじめに 92 歳の梶本淑子（かじもとよしこ）さんの被爆の実相を聞きました。

「被爆時は爆心地付近にいたため、工場の瓦礫の下敷きになり、瓦礫の中から足を引きちぎりながら這い出ました。工場で働いていた中学生の同級生たちを何人も運び出し、その都度生き絶えていきました。死体で埋め尽くされた広島は、死人を焼く匂いが立ちこめ、死臭が服に染みつき、水を飲むのさえも吐いていました。79年を経た今も、被爆者は皆、多発性癌に苦しめられています。」現代では想像もつかないような悲惨な被爆の体験を語られました。

会場にいる小中学生や大人も皆涙しました。

その後は、被爆者の詩を会場の皆で朗読したり、広島の子供たちによる平和への様々な取組の発表も行われました。



午後は、平和記念公園や原爆資料館などを自由に見学し、親子でそれぞれの平和学習を行いました。



5年生の小学生児童の感想文より、「家に帰って夕食後、ぼくは家族みんなの前で、林幸子さんの「ヒロシマの空」を朗読しました。みんな静かに聞いてくれました。祖母は涙しました。祖父も良かったよと言ってくれました。」

保護者の方からは、「8月6日の平和記念式典の日に広島に行き、ニュースの中の式典を目の前で見て、実際に戦争を体験された方の話を聞き、子ども達や地球の未来のために、絶対に核廃絶をしなければならない、貴重な体験を親子でさせていただきありがとうございました。」との言葉をいただきました。

参加した小学生の作文は、豊かな感受性により、原爆の悲劇や命の大切さを十分に感じて学び、平和を伝えていこう行動しようと、各々の思いが書かれています。(別紙掲載)